

課題 1：魚屋で

(中略)

魚屋はギリシャ人である。私の前腕をつかんで、セピア色の包み紙に丁寧に包まれた鮭を手渡す。

「旦那、第二作は進んでいますかい」

私には十四冊の著作がある。だが、魚屋はいまだに私の処女作の話しかしない。二十年にもなるのに、いまだに同じ質問だ。私の返事など聴いていないのだ。もう顔が別の客の方に向いている。立ち去る前に、一言、言ってやろう。どんな反応をするかな。

「私は日本の作家になったんでね」

彼の目がこちらに戻って来る。

「どういうことですか、それ？旦那、国籍でも変えたんですか」

「いや、そういう意味じゃないがね。ただね、今度の新作を『吾輩は日本作家である』というタイトルにしてみたんだ」

魚屋は不安げな面持ちで相棒を見やる。魚を包む役目の若い助手だ。魚屋は、絶対に客を真正面から見ない。

「そんなことしていいんですかね」

「なにが。本を書いてもいいのかっていうこと？」

「いや、そのう、自分は日本人だなんて言っちゃってもね」

「さあ、どうだろうね」

「それって、国籍を変えたっていうことですか」

「いや、ちょっと違うんだなあ。一度変えたことあるしね。あんなこと、もうまっぴらだよ」

「でも、お調べになった方がいいかもしれませんよ」

「どこか調べられるところがあるかな」

「どうでしょうね。日本大使館とか……いや、あっしがね、朝おきて、夜のうちにポーランド人の肉屋になったなんて言っちゃったら、客が変に思うでしょ」

「ポーランド人の魚屋なら分かるけどね。魚売ってるんだから」

「いや、ポーランド人の魚屋なんて、もっとやばいですよ」

魚屋は、次の客の方を向きながら言った。

なににでも口をはさむ男のことを聞いていると、そのうち頭蓋骨に不安の針でも突き刺された気分になる。一応念のため、編集者に電話で訊いておいた方がいいだろうな。問題になるとは思えないが。